

人、そして地域とのつながりを意識した教育

北海道留辺蘂高等学校 校長 赤津博久

担当者 教諭 高橋理人

1 本校のESDの特徴 ～ホールスクール・アプローチ～

本校では、ユネスコスクールに加盟した平成25年度より、各教科で授業内容を見直し、キャリア教育の観点とESDで求められる能力との関連づけを行ってきた。そして、学校教育全体にESD活動をより浸透させていくために、年間のESD取り組み目標を設定し、平成30年度には本校独自のESDカレンダーを作成した。作成したESDカレンダーは、全職員で可視化できるよう職員室内に掲示し、学校全体で意識的に取り組めるよう工夫している。

2 活動・全体計画

全教職員が各教科の年間指導計画にESD活動等を記載し、それを基にESDカレンダーを作成した。各教科・分掌・学年・特別活動の中で実践されているESD活動が明確になった。そして、次期学習指導要領との関係も鑑み、教科横断的な機会や、他者との関わりの中で学ぶ協働的な学習の機会をより多く設けた。また、学期末ごとに「ESDふりかえりシート」を作成・活用し、それぞれの活動を総括してあぶり出された改善点や課題を次の活動に活かしてつなげていくサイクルの工夫を行っている。

3 活動事例

(1) 福祉に関わる学習～教科横断的な学習、地域連携

福祉科の科目である生活支援技術(2年次生)では、音楽科の科目であるリトミック音楽と合同で教科横断的な授業を展開する機会を設けた。平素の授業からリトミック音楽についての学習を深め、旭川大学・短期大学部の出張講義を活用し、音楽療法についての学習の機会も設けた。

また、3年次の総合的な学習の時間(課題研究)において、地域を福祉の視点で見つめなおし、福祉マップを作成した。実際に生徒が車いすで散策し、歩行に支障がなくても車いすでは困難を伴う場所などを指摘し、問題提起を行い地域福祉推進の一助として留辺蘂公民館で地域の人々に発表した。平成29年度には、実際に北見市がその道路補修を計画することとなり、新聞報道でも取り上げられ、地域からの反響は大きかった。加えて、本校では、介護職に就く生徒も多いため、地域のお年寄りの方々と交流する機会を設け、生徒自身の成長につなげられることを期待し、本校体育館を一般に開放し、「るべ美カフェ」を計3回開催した。特に、第3回の「るべ美カフェ」においては、会場を留辺蘂町中央公民館にし、より多くの人が集まることができるよう工夫し、「ハロウィン」をテーマに、仮装やメイクをし、会場を盛り上げた。また参加していただいた地域の方々にも仮装をしていただき、様々な方々と交流し、地域との一体感を生むことができた。



## (2) 国際理解に関する学習

本校はALTが常駐しており、英語科はもちろんのこと、家庭科の専門科目フードデザインでは、身近な食べ物を通してアメリカの食文化を学ぶ実習をALTと共に実施したり、音楽科の英語で歌唱する单元でも、ALTに発音の仕方等を指導してもらうなど、英語に触れる機会を多く設定している。

また、学校設定科目である国際コミュニケーションと異文化理解において、地元にある北見工業大学と連携し、海外からの留学生（本年はサウジアラビア、ブータン、タンザニア）に来校してもらい、母国文化等を講義してもらう活動を毎年行っている。

平成29年度～平成30年度に北見市で開催されたアジア国際子ども映画祭における交流事業として、アジア諸国の学生たちと交流を深めた。平成30年度は、音楽科の授業であるリトミック音楽において、日本の行事や幼稚園での行事、伝統的なわらべ歌、折り紙などの説明や体験的な活動を通して、日本の伝統に対する説明の仕方の工夫などを生徒自身が行い、タイとカンボジアの文化の違いについて話し合うなど、交流の学習を行った。



## 4 成果と課題

本年より本校独自のESDカレンダーを作成し、見える化を図り、ホールスクールアプローチの実践を深めていく取り組みを行っている。各教科の活動の見える化を図ることで、新しい教科横断的な取り組みを進めることが可能になった。しかしながら、ESDとしての評価規準・評価基準の設定、活動のつながりと方向性、「何ができるようになったか」の具体的・段階的な指導及び各教科等における関連性、が見えにくいなど課題が残る。

また、地域の幼稚園や保育所、小学校、中学校との出前授業や交流授業、社会福祉協議会やまちづくり協議会、地元のNPO法人などの地域とのつながりを意識した教育活動を引き続き実践するとともに、北見工業大学の留学生を招いて自国の文化などについて講義をってもらう活動を拡充し、さらに地域と生徒との交流を進める工夫をする。そして、大学や専門学校とも連携し、学習の意欲向上や学習内容の深まりを意識した教育活動を展開していく。

現在、本校はユネスコスクール推進委員を設置し、キャリア部との連携を図りながら進めているが、学校全体でホールスクールアプローチの実践を深めるためには、具体的な組織づくりが必要となる。次年度以降このような課題を精査・分析しながら、より発展的な内容を模索していきたいと考えている。